



山折り
山折りにするときはカッターナイフの背側（切れない側）で軽く唇をつけてから折る

山折り

折らない

皆無とカイト

The Devil Only I Can See.

生成AIを活用した 2DCGアニメーションの 表現研究

研究動機

近年、生成AIに関する様々な議論が至る所で行われている。生成AIは、今までの常識を覆すような制作スピードでクオリティの高い成果物を出力することが可能だ。そして、生成AIの進化は、未だとどまる所を知らない。

ならば、これだけの生成AIが普及する中、「人が何かを創る」というのは、果たして無駄な行為だろうか？

これから先、生成AIというメディアとクリエイターが共生する未来を踏まえた上で、AIを利用し、尚且つ「人にしか出来ない表現」がないか考えた。生成AIが存在してもなお、「創る」上で、人が未だ譲れないものは何か。これらを念頭に踏まえ、『生成AIとの共存』というテーマの元に、本研究を行った。

生成AIを使用した特殊編集

AIで生成されたイラストは画像解析を行うと、人力では基本発生しないような色のノイズが発生する。本編では、その特性を逆に利用した演出を行った。

まずは背景に使用する自分で撮影した左端の写真をAIイラストに学習させる。次に、AIによって作られた画像中央の「素材」を用意する。その「素材」の色のノイズを、左端の写真をベースに、複数のブレンドレイヤーで極端に発生させる。このようにして、右端の写真のような独自の色彩への編集を行った。

また、この活用方法であれば、思想感情を創作的に表現するための「道具」としてAIを使用したものと認められ、生成AIの問題の一つとされている著作権の侵害には含まれないことが確認されている。

※参考文献・著作権審議会第9小委員会報告書 (https://www.cric.or.jp/db/report/h5_11_2/h5_11_2_main.html)



研究成果

本研究は「生成AIを道具として使用する」という趣旨のため、生成AIを活用しただけで完結せず、そこからどのようなテーマを生成AIを使用して魅せたいのかという点に気を遣った。

本作では、主人公から見たセカイ（主人公によって認識された居心地の悪い風景）を上記の生成AIによる特殊編集で表現した。その他の要素も、2DCGに独自の線画処理やテクスチャを使用したり、レンズフレアなどの撮影処理や多数のデザインワークスなど、微細な調整を全カットに施した。



今後の展望

AIの生成は、「考え」に至るまでの体験や軌跡の土壌が偽りである。そのため、やはり人の「創る」行為や生成物とはリアリティなどに明確な差が感じられた。

『生成AIとの共存』とは聞こえはいいが、「創る」という苦悩から避けられるというわけではなかった。むしろ「道具」として利用する分、生成AIの分まで「考え」を求められた。

しかし、その「考える」過程にこそ意味があり、それこそが「創る」上で人が未だ譲れないものなのではないか。そう考えられた研究であった。

作品解説

主人公、碧（アオイ）は日々のストレスに耐えかねて、学校から逃亡。現実逃避の一環として、カイトというイマジナリーフレンドを無意識に想像する。

カイトと共に散歩や買い食いなどを通してリラックスした碧は、自分の心境や欲望を再認識する。そして生きるために、自身のアイデンティティについて、考えを巡らせるのであった。

非行の果てに、少し成長した碧の目に映る世界とは。

東京造形大学 Tokyo Zokei University	皆無とカイト 生成AIを活用した2DCGアニメーションの表現研究	飛沢 宥社 12105018 YUTO Tobisawa
デザイン学科 メディアデザイン専攻領域	2024年度 卒業研究制作作品	指導教員 栗野 由美